

赤い帽子

私は昭和20年8月22日に小諸の与良町に生まれました。終戦1週間後です。10人兄弟姉妹の末っ子です。実際には幼くして亡くなった兄が4人おりましたので、14人兄弟姉妹です。昔は子供の数が多かったのですが、それでも14人は多いと思います。

以前、オーストリアのウィーンへ旅行したとき、ハプスブルク家の女帝マリア・テレジアは王子さま、王女さまを合わせて16人産んだと聞きました。母はマリア・テレジアに2人及ばなかったかと思いました。私が4、5歳の時だと思いましたが、父は与良町の家ではなく、一人でリンゴ畑の一軒家(番小屋と呼んでいました)に住むようになりました。現在の18号線バイパス沿いに女学校があります。(昔の小諸高校。現在は小諸消防署がある)学校の石垣に添ってリンゴ畑があり、畑の中に番小屋がありました。

心の安らぎをふるまうと小諸②

した。犬を一匹飼っていました。リンゴの番をするために住んでいたのかと思います。父のために母が毎日パンを焼いてそれを番小屋まで届けるのが私の役でした。

パン焼き器は鉄製で真ん中に丸い筒のようなものがあり、廻りに練った小麦粉をいれて鉄の蓋をし、リンゴの炭火で焼きまし

た。焼き上がるとそれを背負って番小屋まで届けるのです。与良の家から番小屋まで登り坂で400m位あるでしょう。父の要望で目立つように赤い帽子をかぶりました。番小屋から見下ろすと下から赤帽の子供が坂道を上ってくるのがよくわかると言っておりました。小山平六(与良町出身)

宅地にも近いが、当時はやはり遠いという感じがあり、昼飯にもついていた握り飯の味は格別であった。

キノコの種類としては、ジコボウ(当時リコボウと呼んでいたが、正式呼び名はハナイグチ、ヌメリイグチ、など種類は多い)が中心で、そのほかアマタケや時には、ツタケを見つけたこともあった。特に、まだ傘の開ききっていない、茶色のジコボウが数本固まっているのを見つけた時の感動は今でも忘れられない。ジコボウは傘にぬめりがありみそ汁に入れて食するの



おいしいそうなジコボウ(キノコ大図鑑による)

コラム

駅周辺の風景・小諸駅のまじ

小諸駅を出て直ぐ左側に「小諸駅のまじ」というカフェが目に入る。2020年10月にオープンした。小諸出身の父親の実家が古民家となり、実家の改修の為東京の町田から通っていた金山さん父親が小諸に移住(里帰り)して開いたカフェである。代表は娘さんであり、父親とともにカフェを経営している。小諸にある世界的に有名である丸山コーヒーのブランドや地元の名産や名品と共に駅舎での喫茶を楽しめる。小諸商業高校の生徒とのコラボのコーヒー等も味わえる。筆者は毎月小諸訪問の時は妻と停車場ガーデンやこの小諸駅のまじに立ち寄り、小諸の新たな雰囲気を楽しんでいる。市民や観光客のふれあいの場として新たなスポットとなっている。

小諸駅周辺が昔ながらの町並みとともに新たな町の風景が定着ってきている。三菜与太郎

第二藤村詩碑除幕式について

第二藤村詩碑「千曲川旅情のうた」詩碑建設実行委員長長新井良男さん、総務委員長川原田雅夫さんの連名で封書をお送りください。東京小諸会からも協力をお願いした藤村の詩碑「千曲川旅情のうた」の除幕式を令和4年4月17日(日)に建設地の大手小公園(藤村井戸跡)で挙行することと、東京小諸会にも来賓の案内の予定でしたが、コロナ禍のため、実行委員と小諸市内の若干の来賓で実施することです。懐古園の詩碑とならんで第二藤村詩碑との一対で小

諸の新たな名所として、藤村の思いを伝えたい。

千曲川旅情のうた二は、「小諸なる古城のほとり」で始まる詩であり、千曲川旅情のうた二は、「昨日(きのう)またかくてありけり」で始まる詩である。

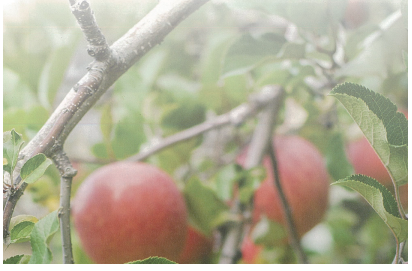
千曲川旅情のうた一は、「旅情」「小諸なる古城のほとり」「千曲川旅情のうた一」と改題されてきた。また、千曲川旅情のうた二は、「一小吟」「千曲川旅情のうた」「千曲川のほとりにて」「千曲川旅情のうた二」と改題されてきた。これについて藤村は、「歌の順序も成るべく創作の時に随ひ、題目もあるものは改め、あるものは加へずべてこの詩集を書いたときの心持ちに近づけることを主とした」と述べている。このように同じ詩を何回も改題した例は他にみられない。藤村自身がこの二つの詩への思い入れが大変強く、愛していたという表れであろうと思われる。

(以上川原田雅夫氏)

信州りんご

戦中生まれで「リンゴの歌」を子守歌代わりに聞いた私は、果物の中でりんごが大好きです。毎年暮れになると、おいしい信州りんごを贈って下さる方がいます。私の大学教員時代の教え子のC・Yさんで、彼女は最も優秀な教え子の一人でした。今から17年前になりましたが、名古屋から春日部の大学に転任した最初の授業で、

初 恋
まだあけ初めし前がみの
りんごの赤に見えしとき
前にさしたる花籠の
花ある君と 思ひけり
やさしく白髪 手ののべて
りんごをわれに あたえしは
うす紅の 秋の裏に
人こい初めし はじめなり
わが心なき、ためいきの
その髪に毛にかかるとき
たのしみ恋の 盃を



新入生の中に社会人学生のC・Yさんがいました。最前列に座って熱心にノートを取っている姿が目にとまり、話をする。私と同年代で信州出身とのことでした。C・Yさんは3年次になると私の主宰するゼミに入ってきました。彼女は小海線沿線の白田の出身で高校は小諸商業でした。お父様が戦死されてお母様が再婚、婚家が商家であったため商業高校に進学し、東京の大手企業に就職、そこでご主人と結婚されました。その後、ご主人が脱サラで起業されて成功、

今はその会社を手伝っている。若き頃の大学進学を捨てきれず、社会人学生として頑張りたいとのことでした。言葉の通り真面目で熱心、模範生で授業には欠かさず出席し、成績も抜群でした。私のゼミでも面倒見の良さから若いゼミ生に慕われ、私も大いに助けられました。彼女は卒業式に和服姿で登壇し、最優秀の成績の学生に与えられる学長賞を受賞、その姿を父兄席でご主人がじっと見ておられたのが印象に残っています。

さて、その後、機会があった長野県内の高校を訪問する際、小諸では小諸高校と小諸商業を選びました。小諸商業高校では高校生訪問者に対する挨拶など礼儀作法が行き届いているのに感心しました。進路の先生にC・Yさんのことをお話し、それがきっかけになつて話が弾んだことを思い出します。

内藤徹雄
元共栄大学副学長